

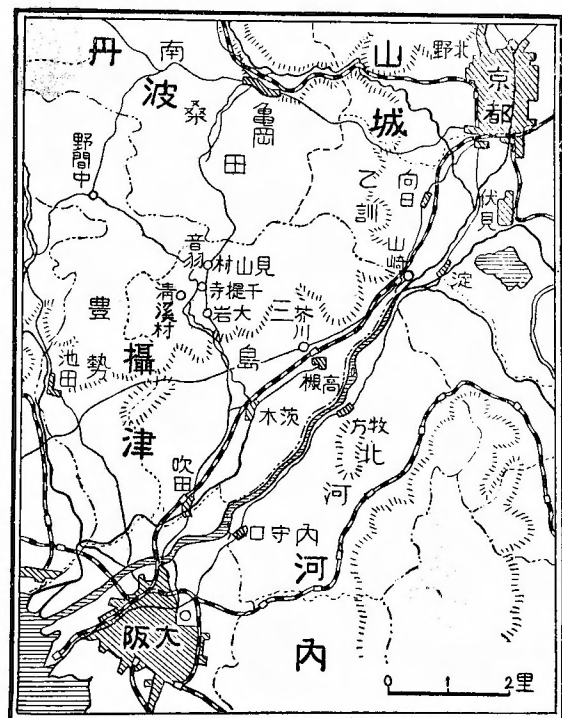
攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物

文學博士 新村 出

一 緒 言

大隅府三嶋郡清溪村大字千提寺せんだてじの舊家なる東藤次郎氏ひがし所藏の吉利支丹遺品の發見せられたるは大正九年九月二十六日なりき。今其由來を尋ぬるに、同年二月頃より當時京都帝國大學に攷學中なりし今の太谷大學教授橋川正氏が、同村の近隣なる忍頂寺の小學校に奉職中の藤波大超氏と共に同地方の吉利支丹遺物に意を注がれ、二月中既に先づ墓石の發見となり、越えて九月に入り兩君外一氏が採訪の結果遂にこの稀有の史料を見出すに至りしなりといふ。やがて十月一日の大阪毎日新聞紙上に於て、遺品の大要は報道せられ江湖の弘く知る所となりしが、橋川氏は翌大正十年一月『史林』第六卷第一號に於て更に之を學界に報告し發見の始末と共に遺物の簡單なる解説を發表せり。尋で本學考古學教室に於ても該發見物の調査に着手し、橋川氏を介して抄物の借用を得嶋田助手鈴木囑托を派して寫眞を撮らしむる等研究上種々の便益を受けたりしが、遂に親しく實蹟を踏査し、遺品を調査するの必要を見四月二十四日濱田教授と予と兩人相携へて千提寺の東氏を訪問し、同家の好意によりて現品を調査し、又多少參考となるべき來歴談をも聽取り、以てこの貴重なる吉利支丹史料の攷究に歩を進むるを得たり。その後考古學教室に於ては、梅原、鈴木兩囑托を派して再び撮影の便宜を得、漸次報告書を

編して其出版を計畫せしが、同年五月予の米歐出張と、年末歸朝後予が研究興味の推移により、事久しく中絶したりき。探訪視察の後約二ヶ年を経過せる今日、實物を離れて、専ら寫真に由り、而も記憶と抄録とを辿りて、ひたすら編輯を急ぎたるが爲に他日の増訂を期せざる可らざる點愈多からんとするは、予の遺憾に堪へざる所なり。



(Fig. 1) 圖略近附寺提千村溪清 圖一第

と共に、京都と堺兵庫また大阪との間の要路に當り、殊に戰國時代より、群雄の據守する所となり、日本の西教史上にも和田高山、中川諸氏の事蹟と相俟ちて顯著なる處とす。幕初以降禁教の峻嚴なるに及びて、この地方より宗門の徒を出し、こと記録に明徴あり。寛政九年太田全齋の

千提寺せんだいじの地たるや、山崎街道の北約一

里半程の山間に僻し徒然草にて名高き宿河原の東邊より北西に入り二三の丘陵を登りて阪路を降ればこゝに達し得べし。高槻よりするも茨木よりするも略同じ道のりにて凡三里に餘る。予等兩人は、高槻より街道を西へ進みて福井村より龜岡街道の山路を取りしが、この方や遠きが如し。(圖一)歸途は、茨木に出で、

京に回れり。この北攝の二城下は淀川を挟みて北河内なる楠葉枚方などの地方

編輯せる契利斯督記に收むる所、萬治元年の調査書に「吉利支丹出申國所之覺」あり。其の攝津國の部には「永井日向守領分高槻より宗門十人許も出申候」と見ゆ。永井氏の舊封にして尙知行を有したりし山城の勝龍寺よりも宗門七八人を出せる由同記に出づ。永井日向守直清が高槻に轉封せしは慶安二年七月にして、爾來相繼いで明治に至れり。轉封後十年にして萬治元年幕府復禁を固うし更に制札を建て、遺徒の檢舉に勉めたるにつきて、高槻よりは右の如く其徒を出しゝなり。此歳や島原亂後二十年、慶長よりは半世紀を隔て、高山友祥の居城時代、城下の耶蘇教全盛期よりは七八十年を經過せり。新渡の黃蘗僧隱元が江戸城に召見せられて、高槻茨木間なる富田の普門寺に留錫せしは恰も是年なりしが、天正年代を回顧するに時勢の變亦大なりと謂ふべし。永井氏の移封以前元和寛永年間には、松平紀伊守家信、岡部美濃守宣勝、松平若狹守康信等高槻に在りしが、皆教徒の査問には意を用ゐたりしに相違なし。天草亂前後數年に亘りて岡部氏が在城し、同氏は寛永十七年九月こゝより泉州岸和田に移りしなり。

是より先き攝河兩州の北部に於て基督教を保護せし豪族には、永祿年間北河内の飯森城に三好長慶義賢(實休)兄弟あり、永祿元龜の交、芥川高槻に和田惟政^{伊賀守}あり。天正年間に高山友祥父子あり。而して和田伊賀守は、高山右近の父飛彈守と兄弟たりといふ。茨木城は元と三好黨の據りし所にして、天正六年其與黨荒木村重が信長と爭ふに至つて、村重の臣中川清秀は本城を以て信長に降り、後秀吉に仕へ高槻の高山友祥と共に佐久間盛政を伐ちしが如きことあり。是等の群雄は堺又は兵庫と京都との間に據りて能く勢力を收めしが、大阪未だ興らず兵庫既に振はざりし此時代に方りては、堺を根據地とし、時には避難所としたる吉利支丹の宣教師どもは

堺との關係深く而も京堺間に威力ある三好和田二氏の保護を受け、巧に貿易と布教との中間に介して是等の小雄を操縦せしものゝ如し。信長に至つては能く這間の消息を理解し、天正六年荒木村重を攻むるに當つて、宣教師オルガンチーノ(所謂ウルガン伴天連)を利用して高山右近を控制せしめしが如き策を弄せり。事は信長公記に見え、又西土の布教史に詳かにせり。之より先き十年右近の伯叔父なりと云へる和田惟政が、永祿十二年堺に避難四年に亘りし宣教師ルイス・フロイス(所謂ヤリイン伴天連)を京に招きしが如き、又此のフロイスが東西の吉利支丹史に名高き邦人ロレンソを京より高槻に滞在中の惟政の許に派遣して、京都南蠻寺建設の地を乞ひしが如き、元龜二年カブラルが巡察使として西國より上京し、義昭に來謁せし際にも亦此高槻に至りしが如き、皆西教傳播史上この地の重要な事し。事を語るものなり。天正十年本能寺の變後、安土のセミナリオ(修學院)瓦解せしや、高山右近は之を一時高槻に置きしことあり。事變の前年にはワリニヤーニが巡察使として豊後より上京して本能寺に信長に謁せんことをせし途にも、高槻城に右近殿を訪ひしことあり。當時この地には伴天連グレゴリー・ヨデ・セス・ベデス(所謂ケリコリ)在住したりき。天正十一年秀吉大阪に築くに及びては、宣教師も力を此新興の都會に注ぎ、この城下に南蠻寺の建設を見るに至りしが、やはり右近殿の斡旋努力多かりき。右近が日本布教僧ロレンソをして大に高槻及び大阪に弘法せしめしも、天正十二年にして、小西行長、小寺孝高、黒田如水等の受洗も是歲にあり、この後三年、秀吉の九州征伐後、宣教師追放令の發布となり、近畿南蠻寺の破壊となり、高山右近の加州左遷となりし以後は、高槻の地方復曩日の盛況を見ず、慶長以後家康の時代に入りて、宣教再び好運に向ひしも、この地方特に教勢の振張

せしを聞かず、されば北攝地方の布教全盛期は天正年中にありしとするも、一旦播かれたる種子は生長して根ざし甚強く、山間の寒村亦その餘風を存せしも偶然にあらざるなり、本大學圖書館に藏する所の西暦一五八五年天正十三年伊太利エネチア刊行の『日本布教年報』⁽²⁾は西暦一五八二年天正十年の本邦宣教の近狀を錄せるものなるが、此の冊子中特に高槻に於ける復活祭行列の莊麗を叙し、同地の天主堂の盛況を記せる、亦以て當代の模様を察するに足る、『日本西教史』再版本四〇八頁、クラッセ原本四三六頁にも天正九年度の景況を述べて近畿地方を京都の安土と高槻との三教區に分ち、高槻には伴天連一人伊留滿一人在住し、美はしき天主堂建立の事を記載せり。

三百有餘年の後、此の舊蹟附近に於て當年の名殘を留めにし吉利支丹遺物の發見せられたるは、史的興味最も大なる所なるが、東氏がいかにして祖先より之を傳紹せしかにつきての記録若くは口碑は全く闕けたり、唯予等が訪問の際當主東藤次郎氏より聞きし所に由れば、傳來の大切な箱三櫃ありて、その中の一個に、かの吉利支丹遺物ども存したるなりとか。この筐棟木にくくりつけてありしが、柴など堆積して所在わからざりしとも云へり。明治時代一たび火災に罹りし事ありしと云へば、建物も古からず。同家にては、紋には梅鉢を用ゐて天神を信仰し、宗旨は曹洞宗に循へりと云ふのみにて、吉利支丹傳統の如何を揣摩するに足るべき資料なきに似たり。尙東氏に就きて聞く所によれば、近隣の見山音羽等の村々にも教徒の後裔ありといふ。他日更に調査の進めらるゝ機あるべし。

今既に予輩の知りし限りに於て、東氏所藏遺品を擧ぐれば左の如し。

一、繪畫及び版畫　繪畫はシャヰエル聖人畫像(圖版第一)及び瑪利亞十五玄義圖(圖版第三)の二點にして、版畫は天使讚仰の銅版畫(圖版第六)一點なり。外に吉利支丹に關する抄物に挟みたる一葉の小銅版畫あり(圖版第一五)其解説は抄物の部の首めに附記せり。

二、彫刻及び其他　彫刻は磔刑聖像の木彫一體(圖版第七)と聖母像の象牙彫一體(圖版第八)となり。木彫聖像は青銅製の筒(第八)に押込みありしと云ふ。此外天目茶碗の蓋の如きもの一箇(第八)印籠の形せる金屬製の小器一箇(第八)蓋の如きものには蒔繪あり。印籠の如きものにはメダル五箇を納れありしと云ふ。

三、メダル類　初め大小種々合せて七箇ありしを見寫眞(圖版第九)に附せしが、後更に一箇加はり、拓本(圖版第十)には八箇あり。

四、抄物　吉利支丹に關する日本文平假名の寫本一冊にして洋裝をなせるは珍らし(圖版第十二乃至第十五)

右四種十數點、概して慶長時代のものにして耶蘇會に屬せし信徒の家の物品とすべし。以下順を追うて簡單なる解説を試みんとす。他日幸に新材料の同家内外より追加せらるゝの機會あらば、彼是相參照して更に攷究に資するを得べきなり。

【註】(一)「史林」第六卷第一號(大正十年一月刊)、橋川正君「北攝

より發見したる切支丹遺物」

(2) Lettera Annale portata di novo dal Giappone da i

Signori Ambasciatori delle così lui successe l'anno MDLX
XKII, In Venetia MDLXXXV, (八四頁至九一頁)

二、繪畫及版畫(1)

(一) シヤギエル聖人畫像

〔卷首圖版第一、第二〕

本圖は耶蘇會開基者の一人にして天文末年日本に渡來し我國布教の礎を置きたるフランシスコ・シヤギエル聖人の畫像紙本を粗末なる掛物に仕立てたるものにして、竪二尺六寸八分横一尺八寸五分主として泥繪具を用ゐて彩色したるものなり、本邦の吉利支丹畫家が西洋の粉本によりて畫きしものに相違なく、手法稍々無味なる譏あるを免れざれども、技巧は次に示すべき十五玄義圖よりも大に勝れたり。聖人がマンテルの下より出したる兩手を十字に交錯せしめて右手の三指にて軽く押へたる赤き心像には教主を磔にしたる細長き十字架さゝりたり。十字架の上端には INRI の略號四字を記せり。こは代官ピラトが揭示せしめし *Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum* の頭字を取りたるものにして「ユダヤ人の王ナザレのゼスス」の義なり。この語約翰傳第十九章第十九節に出で、元と希伯來希臘拉丁の三體文にて揭示せしを、普通拉丁語の略號をのみ取れるなり。基督を周りに雲間に翔翺せる天童ケルビムの姿も頗る巧緻に畫かれたり。十字架の下方に IHS とあるは、耶蘇會の紋章に用ゐらるゝ *Iesus Hominum Salvator* の頭字を取りたるものにして「耶蘇、人類の救濟者」の義なり。シヤギエルが口にせる拉丁の文句は感激讚嘆を表現せるものにして「SATIS EST DNE SATIS EST」とあるは「十分なり、主よ十分なり」の義なり。DNE は DOMINUS の呼格ヴォカチフ DOMINE の略とす。此文句聖人の傳記或は書簡集に出づるなるべき

も未だ詳にせず、或は上川嶋にて熱病に罹り臨終のをりなどに發せられしにや後考を俟つ。

肖像畫面の下には幅三寸五分の一紙面あり、其上部には青地に *S. P. FRANCISCUS XAVERIVS SOCIETATISV* の文字を黄色にて横書せり。*S. P.* は *SANCTUS PATER* の頭字にして *F. R.* は *FRAN* を略したるもの唯末尾の一語の最後の二字の順序が相顛倒せるが如き綴り違へあり。全句は聖父耶蘇會士フランシスクス・シャベリウス⁽¹⁾の義にして、畫像に題せるなり。この横文の下には更に萬葉假名を以て聖人禮讃の文句を唐様めきたる草書にて黄色の地のの上に美はしく書けり。⁽²⁾ 林若吉氏は昨年中この圖の寫眞を一見して早くも之を左の如く讀み試みて、その由を予輩に報せられたり。

瑤夫、羅怒、青周、呼山、別論、麼搓、可羅綿都

即ち、瑤夫、羅怒、青周、呼山、別論、麼搓、可羅綿都はサンフランシスコの音譯字にして、山別論はサベリオに當り、瑤可羅綿都はサカラメントと讀むべしとなり。唯、麼の一字は、葡語の語尾としては相應せず、日本の亘爾波のモと讀みても通じ難し。或は、サンフランシスコ、サベリヨもサカラメント⁽³⁾にても讀みて讀文を和様に書きたるものと解するも一案ならんが、ともかくも全文句の大意は窺はるゝが如し。落款には「漁父環」とあり、「漁父」とは路加傳第五章ゲネサレ湖の漁父を連想せしむ、「環人」の名號は未考とす。その下の壺印は「耶省」の二字ならんと亦林氏の說なり。「耶省」とは蓋し耶蘇會士の應なるべし。これ關防の印の文字が耶蘇會の符牒 *I H S* を十字に結びつけたる印形なると照意せり。されど此讀語の筆者の何人なるかは、今遽に推測することを得ず。唯文祿慶長時代の本邦耶蘇會士が會祖聖人の畫像に銘を書せしものとする外、何等の考案を述べ難しとす。山田右



狀許特藏所侯島鍋及印旗徒叛原島

衛門作の如き吉利支丹畫家が第十六世紀歐洲文藝復興期繪畫の流風を傳へて九州のみならず近畿地方に於ても、天主堂禮拜堂などの爲に、又家々の信者の爲に、筆を揮ひけんことは固より推定し得るも、今かくの如き作品を得て現實にその徵證を見るに至りしは悦ぶべきことなり。但しその彩色に主として泥繪具を用ゐる稀に綠青などを使ひし形蹟あるも、金泥の如きは、聖者の背光にも使用せず、横書の文字にも黃色繪の具を施して金粉を塗らざるが如き粗末なる畫き振りなるは、桃山時代の藝術に比して、あまりに見劣りせらるゝの感なきにあらざれども、この畫像製作の依頼者の位置よりも制限せられしなるべく、又新興藝術發達の程度よりするも之を免れざりしものとすべきなり。

他面より觀るに、此畫はその藝術的價值如何に拘はらず、聖シヤヰエルの肖像畫として、聖人の滅後半世紀内に於て、蓋し聖人を見たるべき人の手に成りし點に於て大に價值あるべし。聖人の傳記中最も古きものゝ一と稱せらるゝトウルセリノ Tursellino の撰著（一五九六年アムスデルダム刊行）に掲げたる肖像等と對照せらるべきものとす。

（二）瑪利亞十五玄義圖

〔圖版第三―第五〕

この紙本瑪利亞十五玄義圖は横二尺二寸、竪二尺七寸、龜甲形の紙に貼付せるものにして、表装を施さざる掛物として信徒の家の禮拜の間などに掛けられしものなるべし。圖樣粗雜なれども古拙愛すべく、彩色は幼稚にして、顔料は在來の泥畫具を用ゐたり。人物遠近陰影など手法に西畫の影響をとゞめたれど、幼稚なる本邦吉利支丹畫家の作品として亦一史料となすに足

らん。中央聖母の頭上にしぼられたる幔幕の有様も日本風に見ゆ。粉本に據りて畫かれしものなることは言ふまでもなし。

此圖の中部は元來ドレスデン畫堂なるラフワエルのシスチナ・マドンナの如く幔幕下に立てるマリヤ及聖子なりしを後その下半を除き去りて二聖を描き、以て一圖に接合して、耶蘇會信徒が尊崇に便なる圖を作りしものなり。二聖の肖像畫として價值あるのみならず、前圖に比して却て精神あるを見る。

この一幅三部より成る。中央は二段に分れ、それを周らして左右兩側と上段とに十五玄義を配したり。(一)中央の上段は聖母幼き耶蘇を懷ける圖なるも、マリヤの胸部以上は顔面と共に剝落したり。聖子の像は極めて拙劣に畫かれたり。(二)其下段圖版第五は聖體秘跡を示し、カリス(聖杯)の左右には年老いたる耶蘇會の開祖ロヨラと稍若きシヤ・フィエルと之を拜仰せるを見る。カリスの形は影薄くして朦朧たれど、その上なるオスチャの象徴は白き圓形に現はれをりて明瞭なり。オスチャには I H S の記號あり。上方には LOVVADO SEIA O SANCTISS[IM]O SACRAMENTO の文字を稍約めて記入せり。全文葡萄牙語にして、今その意味を試みに直譯するときには ^{サンチシモ} いとも尊き秘跡、讚仰せられよ となり。Iouvado は Iouvar (讚むる) の過去分詞にして ^{サクラント} seja は ser (在る) の接續法なり。o は定冠詞にして他二語は形容詞と名詞となること勿論なり。この秘跡讚仰圖はこの文句と共にメダル其他の記號に屢用ゐらる。東氏所藏遺品のメダルにも見ゆ。又嶋原賊徒の用ゐし旗印しにも書かれたり。⁽⁴⁾第二圖さて此の聖體秘跡圖の下段には各二列に割りてロヨラとシヤ・フィエルとの名を記入せり。左方ロヨラの像下には S. P. IGNATIVS SOCIETATIVS IES

VSとあり。耶蘇會士聖父イグナチウス」の意なり。右方シヤヰエルの像下にはS. P. FRANCISCOVS XAVERIUSとあり。S. P. は共に SANCTVS PATER の略語にして、兩教祖の名は上段の葡語に對して一に拉丁語を以てせるなり。横字の字配りは頗る拙なるを免れず。兩聖肖像下二列の横字中、上列は黃色、下列は青色に塗れり。聖者の上衣の青色なる、その他彩色に關する點は一々指摘せざるべし。

(三)周圍の十五^{ミステリヨ}玄義圖(第三圖)は三部に分れ、左側の下より始まりて順次五圖づゝを算へて右側下に終る。或は稱して「ロザリオの十五箇條」とも、單に玫瑰珠^{ロザリョ}ともいへり。九州訛りにて、このロザリオをヅザイロとも呼ぶ地方あり。尙十五の觀念^{ロザリョ}とも「十五くだり」ともさまさまの稱呼ありて生月島^{いきづき}及び浦上^{うらかみ}、外海^{そとみ}地方に傳誦せられし其祈禱文は、外海^{そとみ}の信者間に傳來したる十五玄義圖と共に『公教會の復活』に見えたり。今プチジャン師が安政三年の頃、慶長時代の和解を發見して、その後明治七年『聖教日課』に編入刊行したるものを見るに左の如し。

玫瑰珠十五條

○朝五條 歡びのみすてりよとも云ふ。

第一 童貞聖瑪利亞は聖額^{びるじんさんたまや}伯理厄爾^{さんびりあるあるかんじよ}大神を以て御告^{おんつけ}ありければ、其御胎内に於て天主^{てうす}の御子費略^{おんこひりよ}は人となり給ふと云事。

第二 童身聖瑪利亞は御親類なる聖依撒伯^{さんたいさへろ}の御宿所へ御見舞として赴き給ふ事。

第三 童身聖瑪利亞は御子費略を誕生し給ふ事。

第四 童貞聖瑪利亞御子費略の御誕生より四十日目に天主父へ捧げ給ふ事。

第五 童貞聖瑪利亞御子耶蘇^{ぜやすきりす}基督の十二歳の御時見失ひ給ふて御堂に於て學匠等の中にて御法談し給ふ三日目に見出し給ふ御悦びの事。

○晝五箇條 悲のみすてりよとも云。

攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物

- 第一 御主耶蘇基利斯督は日色瑪尼の森の中に膝の觀念し給ひ御血の汗を流し給ふ時の御悲み。
- 第二 御主耶蘇基利斯督は石の柱に搦め付られ五千に餘る打擲を受け給ふ御悲み。
- 第三 御主耶蘇基利斯督御頭に荊の冠を押込れ給ふ時の御悲み。
- 第四 御主耶蘇基利斯督は自ら十字架を擲げ給ふて加羅瓦署が獄に赴き給ふ御悲み。
- 第五 御主耶蘇基利斯督加羅瓦署が獄に於て十字架に掛り死し給ふ時の御悲み。

○夜五箇條 ごろりやのみすてりよとも云。

- 第一 御母聖瑪利亞の御子耶蘇三日目に元の御肉身に復活せ給ふ御悅。
- 第二 御母聖瑪利亞の御子耶蘇阿里瓦の山より御昇天の御悅。
- 第三 御母聖瑪利亞の御子耶蘇の御昇天より十日目に聖神は御弟子達の上に天降らせ給ふ御悅。
- 第四 御母聖瑪利亞は靈魂と肉親と共に昇天し給ふ御悅。
- 第五 御母聖瑪利亞は天主父子聖神の御前に於て榮福を得せ給ふ御悅

右の外、西紀一六〇〇慶長五年長崎の後藤登明印刷所刊行の平假名交文『ドチリナ・キリシタ
ン』にも、尊ときびるせんまりやのろざりよ申して百五十返のおらしいの事と題して「おん喜び
の觀念五ヶ條の事」と「おん悲みの觀念五ヶ條の事」と「ごらうりよの觀念五ヶ條の事」との三に分
けて擧げあり。又『契利斯督記』にも萬治元年の書上げによりて「コンタツと申珠數の事」と題して、
サンタマリヤの十五の觀念として「至極のよろこび」「至極のかなしみ」「至極のたのしみ」各五ヶ
條あることを擧げ、此十五をサンタマリヤの御一代記とて、一つ毎に十遍づ、のオラシヨを申
すと記せり。

今この十五玄義圖(第三圖)を見るに、(第一)喜びのミステリヨは左側五圖にして最下の御告に

(Fig. 3) 圖義五十五亞利瑪 圖三第

(IV) Scenes from the Mysteries of the Sorrow

(6) Agony in the Garden of the Mt. Olives	(7) Flagella- tion of Jesus	(8) Crowned- with thorns	(9) Carrying of the Cross	(10) The Crucifix
(5) The Finding of Jesus in the Temple	(1) MADONNA with the INFANT JESUS			(11) Resurrection
(4) Purification of the Virgin				(12) Ascension
(3) Nativity of Jesus	LOWADOSELAOSANCTISSOSACRAMENTO			(13) Descent of the Holy Spirit
(1) Visitation	(11) PORTRAITS OF St. Ignatius St. Francis Loyola Xavier			(14) Assumption
(1) Annunciation	S.P. IGNATIVS S.P. FRANCISCVS SOCIETAIVS IESVS XAVERIVS.			(15) Coronation of the Virgin

(III) Scenes from the Mysteries of Joy

(V) Scenes from the Mysteries of Glory

(I) 瑪利亞及童形耶穌

(II) 聖イグナチウス・ロヨラ聖フランシスコ・シャヴィエル肖像

(III) 喜びの玄義

(IV) 悲みの玄義

(V) 榮福の玄義

(15) 聖母受冠 (14) 聖母昇天 (13) 聖靈降臨 (12) 耶穌昇天 (11) 耶穌復活 (10) 十字架磔刑 (9) 十字架擔負 (8) 耶穌棘冠 (7) 耶穌折檻 (6) 耶穌苦悶 (5) 耶穌發見 (4) 耶穌奉獻 (3) 耶穌誕生 (2) 聖母訪問 (1) 聖母御告

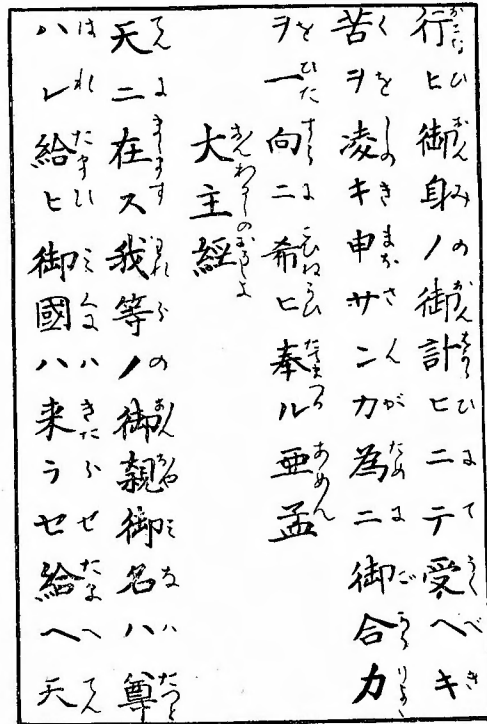
始まり順次上へ數へ(第二)悲みのミステリヨは上段左方より右へと進み(第三)榮福たうしつのミステリヨは右側上部より漸次下へと向ひ、マリヤの昇天を経てマリヤの戴冠に終る。圖版第四に示す所は該十五玄義圖の左右各二圖を摘出して大きく見せたものなり。左方二圖は下が聖子降誕、上が聖子奉上をあらはし、右方二圖は上が基督復活下が基督昇天を示す。神人天使の姿の和臭を帯びて洋式に則れるを注意すべく、日本吉利支丹藝術の幼稚なる一標本として興味深しとす『公教會の復活』第二五六頁の左圖に載する所の十五玄義圖は、撮影鮮明を闕き比較の用に供し難けれども、構圖及布置共に東氏所藏圖に相違せる所多きは之を知るを得るなり。其圖にては上中下三段に分れ、下段右より左へと始まり、基督一代記聖母のロザリヨが五個條づく段々上へと進みて上段の左端がマリヤの昇天にて終れり。元來十五玄義の如きは聖母緣起とも題して繪巻物にでも畫きたらば藝術的興味更に深かりしなるべしと思へど、吉利支丹藝術はそこまで伸び得ざりしが如し。但し伊曾保物語の繪巻物も存在したる程なれば、かゝる宗門に關する繪巻の發達なかりしとは速斷し難きも、信仰の對象としての宗教畫の形式としては單に掛軸に仕立て、禮拜したるに留まりしにはあらずやと推察せらるゝなり。とにかく此の圖は手法としてナイーヴなる所却つてシンセリチーを見るべく、畫題の多様なると多少日本の筆致ある點と却つて興味ありとなす。

(三) 銅版天使讚仰圖

〔圖版第六〕

この圖下端に PRIMA PETTIO (第一の祈願) と題し上端に「主きみの祈いのち」(Lord's Prayer) の句を掲げ中

中央に大天使合掌禮讃の形を表現したれば、姑く題して天使讃仰圖といふ。周縁上部その他處々
 缺損多けれども主要なる部分はいく保存せられたり。畫面は竪一尺九分横八寸三分、全紙面は
 竪一尺五寸三分横一尺一寸四分なり。西洋紙摺りにして、製版印刷は日本にあらず。蓋し舶載品
 なるべし。



(Fig. 3a) 條の「經の主御」課日教聖 a圖三第

天使の頭上に弧狀をなして一列の
 拉丁文の見ゆるは「主の祈」中の名句な
 るが、こゝには末尾の文字闕けたり。今
 全文を綴れば左の如し。

SANCTIFICETVR NOMEN TVVM

これ新約全書馬太傳第六章第九節以
 下及び路加傳第十一章第二節以下中
 に見ゆる所謂バートルノーステルの
 祈禱文の句にして、今更にその前後句

を示さんに。

Pater Noster, qui es in caelis: SANCTIFICETVR NOMEN TVVM. Adveniat regnum tuum.

『聖教日課』にはこの舊譯文を以て「天に在ます我等の御親御名は尊ばれ給ひ、御國は來らせ給
 へ」と見え、名けて「御主の經」といへり。尙舊時傳誦の文句諸書に少異あり、別に註するが如し。⁽²⁾
 『聖教初學要理』には「天に在ますのおらしよ」と稱し、「第一番勝れたるおらしよ」となせり。この銅

版畫中、天使の左側下石柱の如きもの、欄内に記する拉丁文の末より三行目にも、標題と同じ *Prima Petito* 等の句見ゆるは、亦この第一祈願に當るものなるべし。但しこの欄内の全文は、予輩未だ出典を詳にせず、他日の考究に譲らん。天使の右側下なる欄内には、聖書より四ヶ所の引用文を記せり。第一は馬可傳第十六章第十六節聖主復活後その語に「信じ且洗せらるゝ人は救はれ云々」とある文句の抄出なり。文に云へらく、

Qui crediderit et baptizatus fuerit saluus erit

但し本圖には出典を馬太傳二一 Matt 21 とせるが如く見ゆるは誤なり。第二の文は、加拉太書使徒保羅書簡第三章第二十五節に見ゆる「キリストに由りて洗せられたる汝等は悉くキリストを着せるなり」とある語にして、原文は左の如し。

Qui cum enim in Christo baptizati estis,

第三の引句は、印刷鮮明ならず、出所未考とす。第四の文は馬太傳第二十一章第二十五節に出で、最後の週間ジエルサレムに於ける基督の語にして、「ヨハネの洗禮は何處よりなりしぞ、天よりか將人よりか」とあり。原文は左の如し。

Baptismus Joannis unde erat e Coelo an ex hominibus.

天使の背景はガリレアの湖を象りしなるべく、左邊に見ゆるはヨルダン川にて基督がヨハネに受洗せる所ならん。右邊には圓き四阿屋めきたる建物の下に一人の女背光ある基督の前に跪きその傍に數人群りたり。蓋し馬太傳第十五章^{二一節以下}馬可傳第七章^{二四節以下}に見ゆる所の惡鬼憑きたる幼女の母が主の御前に伏したる圖ならん。

下段の圖は洗禮の儀式を示したるなるべく左隅に見ゆる十字架の圖の下には *In Fide* (信德) と標し、右隅に畫ける聖^{カリ}坏と聖^{オス}餅との圖の下には *Ad Baptismi Sacramentum* (洗禮の秘蹟) と標せり。構圖の部分的説明の大要は右の如し詳細は之を他日に期し、茲には本邦に於ける銅版畫につきて一言を加へて止まんとす。抑も銅版術の我國に傳はりしは天正の末年にあり、天正文祿



(Fig. 3b) 像亞利瑪版銅家有 b圖三第

紀一五九六年(慶長元年)及翌年の印行なり、その他本邦西土各少數銅版畫の遺品ありと雖も之を東氏所藏の此天使讚仰圖に比ぶれば甚しき逕庭あるを知る。當時我國のうら若き吉利支丹藝術は未だかゝる程度の版畫をすら製作すること能はざりしなり。

の交西邊の耶蘇會學林に於ては、この技術をも生徒に授けしかば、其技工進みて作品の優秀なるものも現はれしこと史に見ゆ。現存最古の作と目すべきは牛津大學のボドレアン文庫所藏本なる肥前高來郡加津佐の學林にて印行せられし諸^{サントス}聖傳の扉^{さびら}繪なる彼得の像にして西紀一五九一年天正十九年(の製なり。長崎大浦の天主堂亦同じく嶋原半島なる有家にて成りし古銅版畫二葉を藏せり。二畫共に聖母の圖にして、西

(四) 銅版耶蘇奇蹟圖斷片

〔圖版第一五四〕

この銅版圖は吉利支丹抄物の書に挟みありしものにして、粗畫なれども恐くは日本製にはあらざらん。耶蘇奇蹟使徒禮拜の狀を寫せるものなり。

【註】(1)本邦當時の西洋畫につきては、拙著「西洋畫傳來の起源」

一篇、「太陽」第二十三卷第一號大正六年一月號に出せり

尙拙考「日本最古の銅版畫」(詩と版畫)第二輯、大正十二年二月號)參考

(2)破邪禪僧雪窓宗崔の邪教大意に「さんふらんしすこしやひゑる」と假名書にせるを、同書の漢文本對治邪執論には萬葉假名にて三附亂志須古姿毘惠襲とせり。文字の宛方は參照に比すべし。この書は正保五年の著なり。

(3)「公教會の復活」の附録に所載なる浦上外海地方に傳はりし祈禱文には、傳誦間にこの拉丁文を記して

パーテル、ノートル、キンソ、イーセ、サーツ、シツ、
ノメー、ツ、……

とせり。和譯にて傳はりしものは、

「天に在ます我等が御親御名も尊まれ給へ、御代來り給へ」とあり。契利斯督記に載する萬治元年の所録には「御名を尊まれたまへ、御代きたりたまへ」と見ゆ。聖教初學要理には、御主のおらしよ又は天に在ますのおらしよと名づけて、「御名は尊ばれ……御國を來らせ……」とありその他煩瑣なれば略す。

(4)對外史料美術大觀、第二一圖(本冊第二圖)の旗。

三、彫刻及び其他

一 耶蘇磔刑木像

〔圖版第七、第八〕

耶蘇磔刑彫像一軀は、胡粉地に彩色を施したる木彫にして、總高さ七寸、擴げたる兩手間六寸五分あり。今之に附きたる十字架を失へり。初め發見せられし時には、兩腕接續目より外されたるまゝ、全軀を青銅製の圓筒の内に痛々しげに押籠められありたりといふ。但し圖版の寫眞には、兩腕を接合はせて撮影せり。この圓筒は、保存また隱匿の際、在合せのものをを用ゐたるまでに、特に作りたるものにはあらざるべし。彫像は、骨格肉附は更なり、軀幹四肢の均整など頗る解體學的にして、製作凡手の能くする所にあらず。前述の繪畫に比して優れたること遠し。當時本邦の彫工の及ぶ所にあらずと思はる。現今此種の木彫の存するもの、數年前發見せられし足利附近なる龍江院所藏のいはゆる荷狄像と此像とを併せて雙絶とすべし。⁽¹⁾

二 聖母象牙彫像

〔圖版第八〕

此聖像の優秀なるに反して、象牙彫の聖母像は粗製たるを免れず。表情の聊かわざどらしき嫌ひある外、姿態何となく日本人の手に成りしには非ずやと感ぜしむ。總高二寸六分、背面は平たく一小孔を穿てり。他の物の附著して裝飾の用をなせしものか、顔面の稍大なる、胴と足との不釣合なる、藝術品としての價值なく、悲しめる聖母としては感情を惹き難し、品位の乏しきも瑕なり。

三 其他の遺品

〔圖版第七、第八、第九〕

圖版第八(2)に示す所は何物の片割れなるかを知らず。天目茶碗の蓋の如きものにて、木製なり。表面金蒔繪にて池水と二三種の水草とを畫けり。下部に大小數箇圓形に十字入りの模様見ゆるは、何を象りしものか明かならずと雖も、とにかく十字の表象を意匠化せるものなるべし。或は云ふ蛇籠をその一端より見たる形を意匠とせしには非ずやと。蓋の裏面に亦三箇の十字模様ありオスチャを容るゝ器の蓋にやとも思はるれど、著しく日本化せるは、第十五圖に示す所のものの比にあらず。⁽²⁾寫眞にては、聖像を納めたる筒と並置しあれども、原品は二者何等關係あるにあらずと知るべし。

同圖版下部に示せる(4)は印籠の形せる銅製の小器にして上部と兩側とに鑲ありて、それに黄色の紐を通せり。總高二寸二分、厚さ七分五厘。發見の際にはこの器中に五箇のメダル(圖版第九及十23457)を納めありしと云ふ。其左方に示せるはメダル(圖版第九6)一箇を入籠^{いんろう}にしたる金屬製の小器なり。器の底に黄色天鵝絨の座を附着しあり。

【註】(1)「足利考古圖集」(丸山源八編大正九年刊)第五六圖に出づ。

此耶蘇教僧木像は、元と荷狄様と稱せらる。栃木縣足利郡吾妻村大字上羽田龍江院(曹洞宗)の所藏にして傳來に就ては一二の説あり。木像の高さ三尺四寸五分、荷狄様とは、カテキスモの訛にして、カテキスタのことならんとは人々の一致する所なり。

(2)名古屋に於て大正七年春發見の蒔繪螺鈿入盒子は、オスチャを容るゝ器にして直徑三寸八分、全高二寸八分五厘。蓋の面に「H」の文字あり、「史林」第三卷第三號(大正七年七月刊)新村出「京都南蠻寺興廢考」に附載せる所を見るべし。(本冊第十五圖)

四 メダル類

〔圖版第九、第一〇〕

メダル類總計八箇、内一箇(第1)は特別の金屬製容器なり。底に黃色天鵝絨の褥を着けたり。此器表裏二箇に離れ又吊下し得べし。その他の中更に五箇(2 3 4 5 7)は圖版第八4の印籠形の銅器に納め、黃色の紐を乳に通しありしこと前條述べたるが如し。

吉利支丹のメダル類は、是迄我國の諸地方に襲藏發見又は見掛けらるゝこと少からず、羅馬人歟、狀其他の編著及び古記錄に登載せられしことも往々これありき。明治以後の圖書に記載せられしもの二三あり。されば上述の繪畫銅版畫彫刻などさほど稀觀にはあらざれども、從來周知のものと對照の要もあり、將來新發見のものを目安ともなるべければ、逐一左に解説する所あらんとす。

(1) 法王グレゴリオ十四世記念牌直徑一寸三分。表面に法王グレゴリウス十四世右向きの側面胸像あり。周縁に GREGORIVS XIII PONT. MAX. と印文あり。後なる二語は PONTIFEX MAXIMVS の略語にして「最第一無上等」の義なり。下部の左方に N. I. と見ゆるは原語未考とす。裏面は、悲みの聖母と基督と左右相對せる胸像にして、周縁の印文には IN GRAM PHILIPPINARVM とあり。下部には ROMAE AN. 1591 と見ゆ。AN は ANNO(DOMINI) の略語にして「年」の義。首めの語は「羅馬」の語の屬格にして、次の語は「年」の與奪格なり。即ち此記念牌發行の處と時とを示すものとす。されど複數屬格なる「比律賓」の語は其前の一語不鮮明なれば、其意味を解するに苦しむ。従ひて今直に此二三語の一短句が何を標するかを知り難し。されど幸に生月嶋に傳はりし同じメダル

が今尙存在する由なれば、他日參照して其の印文を読み得べしと信ず。但し生月嶋傳來のものは寫眞に由るに、所謂コンタス(珠數)に繋がれたるを見れど、こはブチジャンが附けたるものにして原狀にあらずと云ふ。

グレゴリオ十四世は一五九〇年十二月より翌一五九一年十月に至るまで在位僅に一年未満の法王にして特筆すべき事蹟なく、之を三代以前のグレゴリオ十三世が歴史上著名にして且つ日本に於ける布教に關しても功績亦た顯はれたると比倫すべきにあらず。東京帝國大學文學部に、日本使節羅馬着紀念銅牌模造品一箇あり。一五八五年(天正十三年)の原鑄にかゝり法王グレゴリオ十三世の半身像を現はしゝものにして、其徑一寸五分あり。彼此對照に供すべし。即ち此牌が大伴大村有馬三氏の使節等の羅馬入りを記念したるが如く、高槻並に生月嶋襲藏のクレゴリオ十四世記念牌は比律賓諸嶋の何等かに關するものなるべきことを想像するも可ならんか。比律賓諸嶋には、フランシスコ門派等勢力大なりしも、耶蘇會の徒も亦少きにはあらざりしならん。或は又フランシスコ門派等に緣故ある記念牌の轉じて耶蘇會信徒の手に歸せしこともありしならん。惟ふに比律賓關係のメダルが耶蘇會關係の遺物と共に藏せらるゝも決して甚しく怪しむには足らざるべし。いづれにせよ、かゝる記念牌が何の由緒ありて藏せられたりしかは深く追究するを要せざるべく、單に宣教師より貰受けしものと推定するも差支なかるべきなり。グレゴリオ十四世牌の年紀、一五九一年即ち天正十九年は、恰も秀吉が比律賓(呂宋)に入貢を命じたる年にして、翌文祿元年に至りてフランシスコ派の師父等初めて渡來し、名護屋滯陣中の秀吉に謁し、次年以後京都伏見邊に布教を開始せしことあり。是れ彼のメダ

ルの來歴を他の側より揣摩するにつきて參考に資すべき事件たるべし。

(2) 聖體秘跡メダル。楕圓形の青銅製小牌にして、豎五分弱、横四分弱、表面には中央にカリスとオスチヤとあり、左右より天使跪きて之を禮拜せる様を刻し、裏面には葡萄牙語にて「いとも尊き秘跡讚仰せられよ」の義なる LOVADO SEIA O SANCTISSMO SACRAMENTO の銘文あり。表裏二圖を合せば、嶋原賊徒の旗印しに用ゐられたるもの(第二圖)と全く構圖銘文を同じうす。旗印しの方は天使の容姿甚しく和臭に陥れり。東氏所藏の繪畫中にロヨラとシヤギエルとの二聖が秘跡禮讚の圖あり。彼此相參照すべし。又解説はかしこに詳にしたれば、こゝには略述に止む。

(3) 聖母無元罪像メダル。聖母マリヤの汚れなき御受胎(おんやうり)いはゆる Immaculée Conception を現はせる小楕圓形のメダルにして、豎三分五厘、横四分五厘あり。眞鍮にして、綠青附きたり。表面は聖母像にして、東京帝室博物館所藏踏繪にも同圖のもの二面あり。對外史料美術大觀第一輯三十一圖に載せたり。メダルの裏面には耶蘇會の記號 IHS を大字にて勒し、その上に後光ある聖子の像を刻せり。

(4) 十字架捧持聖者メダル。同く小楕圓形のメダルにして、豎四分五厘、横四分。表裏共に聖者が十字架を捧持せる圖樣あり。ロヨラとシヤギエルとの兩聖にやと思へど、確かならず。

(5) シヤギエル聖人記念牌楕圓形なれど、前三箇よりも約二三廻り大なり。豎五分五厘、横四分五厘。眞鍮製にして、綠青附着せり。表面にはシヤギエルの肖像を刻して、B. FRANC XAVIERIS の文字を勒す。B の字は Beatus の略字なるべし。即ち聖人(ベアト)の義なりとす。他面には上部に神の面相を稍大きく圖して、左右に教父とも見ゆる者二人立ちたり。壇下には(P.S.)等の文字見ゆ。

(6)聖母子及磔刑聖像牌。圓形のメダルにして徑約八分。一面には聖母聖子を懷ける圖他面には耶蘇磔刑の圖を刻せり。

(7)耶蘇瑪利亞聖像牌。前者より一周り大なる楕圓形のメダルにして豎八分横七分。一面は耶蘇他面はマリヤなり。共に左向きにして悲みの聖母子なるべし。

(8)聖母子兩面像牌。楕圓形のメダル一箇豎九分餘横七分五厘。このメダルは予輩の一見せざりし所又撮影もせざりし所にして、唯不鮮明なる拓本のみを載す。推察するに、兩面とも聖母子なるが如し。拓本にて下位なる一面は、壇上に聖子を懷けるマリヤを聖徒等の左右に跪坐して禮拜し御手に接吻せるさまなるに似たり。東京帝室博物館所藏の踏繪のうち之に類する圖柄のもの四面あり、宜しく參考すべし。⁽³⁾

以上メダルの内最初の二箇の外は打型にあらず、粗末なる鑄造なり。蓋し歐洲の本場にて製せられしものに非ずして東洋其他にて作られしものならん。

【註】(1)邏娑人欸狀一冊は、寛永五年日本に潛入せし伊太利出身の宣教師シドツチを糾問し其所持品を書上げなどせし結果を録せしものにして、新井白石の西洋紀聞に附録して白石全集等に納めて刊行せられたり、「異國人致所持候大袋之内諸色之覺」とある條の中に、「金にて丸く拵へ其内に人形彫付候物數四十二」とありて、「金にて丸き物はメダアリヤと申物にて是又大切成物の由」と見ゆ。其中、銘文と肖像とを勒せる一箇のメダルの圖を挿入し、「金にて大さ七分四方程厚さ五厘程づゝ有之候何も皆金にて中之繪様は少しづゝかわり申候、數四十二」と註せらる。

西洋紀聞(正徳五年成)上卷の末には、シドツチの所持品を算上げたれど、メダルのことを特筆せず、「これらの物の形製等詳に記さむ事無用也、故にこゝに略す」とせり。立原翠軒の切支丹法器と題せる寛政十二年の記録にも鑲錢大小異文二十一其他を概説せり。メダルが其主要なる部分を占むるなるべし。大概鑄水が文化九年に編せる金城秘鑑中の歸朝衣長道具考略にも、支倉が將來せる品物のうちにも、「色々板金二十六」と見ゆ。蓋しメダル類なるべし。鑄水存響、乾卷參考。(以下補遺を見よ)

四、切支丹抄物

〔圖版第二一―第一五〕

總 說

東氏所藏の吉利支丹抄物一冊は元と抄物を謄寫したる後に製本したるものにあらずして、日本製雁皮紙を西洋仕立に綴じたる厚き手張に宗門に關する要義を書込みたるものなり。即ち墨附の部百三十八枚を算しその第一三八丁末尾の文章中斷せるまゝ以下數葉脱落散佚し、爾餘の紙葉は尙少からず殘存せるを見る。小形袖珍本にして豎四寸六分横二寸七分五厘厚一寸五厘あり。

今之を東京帝室博物館所藏『耶蘇敎寫經』と題する平假名拉丁文聖詩集の形と比するに稍大なり。かの詩集につきては尙後文に一言すべきが、豎三寸横二寸厚七分五厘にして、同じく鳥の子の紙を西洋綴ぢにしたるものなり。大小と表装とこそ異なれ、他の點に於ては二書甚相似たり。詩集も墨附四十八枚の外、餘白紙の方三倍ほど多く、而も最後の墨附紙の脫離して失はれたるを見るが如き、その體裁この抄物に似たる所多し。

此抄物洋装なること一見直に注意せらる。その體裁圖版(第十)を見て知るべし。紙質より判斷して日本製なることを知れど、表装は皮製なり。この新式の手張を用ゐて、慶長頃の信徒が筆墨を以て他本より抄録したるなり。予輩が最初披閱せし際には、枝折のやうに小き一葉の銅版畫を挟みありたりしを見たり。こは勿論口畫又は挿畫の如く本に添ひたりしものにはあらずして、持主か讀者かが假りに入れおきたるものと認めらる。構圖は、耶蘇奇蹟聖徒禮讚の畫にして粗

なるものなり。日本製の如くにも見ゆれど、やはり舶載品なるべし。(圖版第一五)

序文奥書の類をはじめ年月の記入もなく所藏者の名もなきを以て、予輩は本書の編著抄録傳來等に關して何等知る能はざるを遺憾とすれども、その慶長時代の抄寫にかゝることは疑なかるべしと信ず。又外題もなく總括的の内題もなければ、遽に書名を附し難きも、その寫眞複製本に對しては本學附屬圖書館の受入に際して『切支丹宗門雜書』と題したり。これ率爾便宜上の命名に止まれど、雜書の名稍妥當を闕く。幕末明初の編録刊行にかゝる聖教初學要理と題せる書物の名によりて、この抄物を聖教要儀などと呼ばんも可ならん。又宗門式條とも同式定とも名づけ得べけれど、今姑く『東本吉利支丹抄物』と稱せんとす。さはれ開卷の首に『御みいさのおかみやう并ニ觀念ノ事』とあるは、初章の標題なれど、以て總名にも代ふるを得べきが如し。何となれば、初章の次に連禱クラニヤスあれど、こは寧ろ初章の附録にすぎず、第三章以下に至りてはいはゆる觀念メデタサンの事を以て満たされたるが故に、この抄物は主として彌撒及觀念を録したるものと見倣して差支なければなり。今本書を通覽するに固より章節の序次を定めがたきものあるも、概括して左の四章に區分しおくを便とす。第一章は凡そ三十三段より成ること明にして、第二章は前後二つの連禱クラニヤスより成れるが如し。第三章は七曜日一週間に亘りての觀念メデタサン七ヶ條に分れ、條中更に細節を設けたり。但し第四章以下は之を總括して一章となさんはいかゞかと思はる。即ちメデタサンの外、コロキヨ、エサメ等の章を含み、又アベマリヤの事をも録するが如く、幾分か多岐に涉れり。又これら諸章は他方より見るに、毎七曜日の觀念メデタサンを記載せる前章と連絡あれば前後通じて觀念篇ともいふべき一篇を成すものとも認めらるべし。要するにこの抄物は彌撒篇ミイサ

及びその附録なる連禱と右の觀念篇との二篇より成るとするを至當とすべし。されば區分の便宜上より全篇を四章に分ちおきて假りの目次を編すること左の如し。丁數は原書になき所なるも、編者附記して索出に便せり。目次には原書の文句を判明ならしむる必要上洋語を片假名に書改め又多少の修正を試みたり。横字にて原語を註したるが、尙後に掲ぐる語彙を参照すべし。

【第一章】御ミイサ(missa)の拜み様并に觀念の事 一一八

- 一 コンヒサン (confiteo) の段
- 二 イントロイト (introito) の段
- 三 キリエ・エレイン (Kyrie-eleison) の段
- 四 グロウリヤ・イチケセリシス (Gloria in excelsis) の段
- 五 初番のドウミヌス・ボウビスクタ (Dominus vobiscum)
- 六 オランヨ (oratio) の段
- 七 エピストラ (epistola) の段
- 八 アレルウヤ (alleluia) の段
- 九 御經を左右に直し玉ふ事
- 十 エワンゼリヨ (evangelio) の段
- 十一 ケレイド (credo) の段
- 十二 二番のドウミヌスの段
- 十三 みつをカリス (calice) に玉ふとのの段
- 十四 オヘトリヤ (offertoria) の段

吉利支丹抄物

- 十五 手を洗ひ玉ふ段
- 十六 オラテ・フラテ (orate frate) の段
- 十七 ペレハシヨン (prelacion) の段
- メメント (memento) の段
- 十八 カリスの上に兩の手をおい玉ふ事
- 十九 オウスチャ (hostia) を上げ玉ふ段
- 二十 カアリスを上げ玉ふ時
- 二十一 オウスチャとカリスと一つづつ上げ玉ふ事
- 二十二 パアテル・ノウステル (Pateroster) の段
- 二十三 パアセン (パシヨン paxa, passion) の段
- 二十四 オウスチャの段
- 二十五 アニウス・キイ (Agnus Dei) の段
- 二十六 ドウミヌへの段
- 二十七 コムニヨ (communio) の段
- 二十八 ドウミヌス・ボビヌタム (Dominus vobiscum) の段
- 二十九 オラシヨの段
- 三十 後のドウミヌスの段
- 三十一 イテ・ミサ・エス (Ite missa est) の段
- 三十二 ベンサン (bengao) の段
- 三十三 末のエワンセリヨ

【第二章】サンチイシモ・サカラメント (santissimo sacramento) のラタニヤス・(latinius) 一九―二二

【第三章】一七日に分くる最初のメヂタサン(観念mediação)の七ヶ條、二三―二〇二

- | | | |
|---|----------------------------|-----|
| 一 | セクンダ・ヘリア (secunda feria月曜) | 二三オ |
| 二 | テルシヤ・ヘリア (tertia feria火曜) | 三四オ |
| 三 | クワルタ・ヘリア (quarta feria水曜) | 四四ウ |
| 四 | キンタ・ヘリア (quinta feria木曜) | 五三ウ |
| 五 | セスタ・ヘリア (sexta feria金曜) | 六二ウ |
| 六 | サバト (sabbato土曜) | 七三オ |
| 七 | ドミンゴ (domingo日曜) | 八七ウ |
| 八 | 右のメヂタサン并に其德儀の事 | 九九オ |

【第四章】一〇三―一三八

- | | | |
|---|------------------|------|
| 一 | 願念の本 | 一〇三オ |
| 二 | 願念の條々 | 一〇八オ |
| 三 | コロキヨ (colloquio) | 一一四ウ |
| 四 | 同、サンタマリヤへ | 一一五ウ |
| 五 | 死するの願念 | 一一七オ |
| 六 | アベ・マリヤの時の願念 | 一二〇ウ |
| 七 | エサメ (exame) の事 | 一二四オ |
| 八 | 御糺しの願念 | 一二二ウ |

以上諸章のうち第一章ミイサの式定に關するものは、明末艾儒略(伊太利出身の教父デユリ

オ・ア・レ・ニ (Ginlio Meni) の編述にかゝる『彌撒祭義』などと類を同じうす。予輩はこの一章を名づけて Ritus Celebrandi Missam とはいふべく、即ち本學所藏の一六五六年巴里刊拉丁文の『彌撒錄』⁽¹⁾故本學講師オリアンテス氏贈に掲ぐる所と參考して得ること少からず。明治元年長崎版『聖教初學要理』卷四秘跡^{ミサ}之事的一篇亦對照すべき點多し。御彌撒之事、御みいさのおがみやうの章の如き特に一見すべし。此書は三百有餘年前西肥地方に於て讀誦せられし要文を幕府季世のころ錄して、司教ベルナルド・ブチジャン Bernard Petitjean の刊行せるものにして、羅馬の諸文庫に藏する所の『コンヒサン』及び『ドチリナ・キリシタン』サトー氏日本耶蘇會刊行書志第八號第九號第十一號と對校すべきもの多きが如し。これら三本みな平假名交り和裝本にして、その寫眞は遠からず舶載すべければ、異日この東本吉利支丹抄物とも比較せんことを期す。本章の全文は今茲に之を印刷に附し、文中に見わたる洋語名彙をその末に附録して考究に便にせり。此章三十三段より成れるは、基督の享年三十三歳なるに囚みしなり。第十七段の次に、別に數字を以て標せざる一段を附載せるは右の三十三數に泥みたるが爲か。

第二章の連禱^{ラタニヤス}は、首めの方二頁なるキリエレizonを寫眞及び活字に印行し、舊譯を添へ併せて略註を施せり。

第三章七曜のメヂタサン七ヶ條のうち、寫眞に附したるは、セクンダヘリヤ(月曜)の條の首(二十三丁オ)テルシヤヘリヤ(火曜)の條の中程(三十九丁オ)、セスタヘリヤ(金曜)の條の首(六十二丁ウ)、サバト(土曜)の條部首(七十三丁オ)、ドミンゴ(日曜)の條の首(八十八丁オ)尾(九十九丁オ)、及び本章總括の一節の首(同上)にして、印刷に附したるは右の諸條及び之と連接せる前後の文章等なり。洋語名彙は次章の

分と共に最後に附載したれど、所掲の洋語は、抄出せる文章中に出づるものに限りたり。

第四章 願念に關する諸節は、浦川和三郎氏の『公教會の復活』附録西肥生月嶋に傳來せし祈禱文のうち「七度の觀念」と題せる一章と對照すべし。この中にも「コロキヨ（會話）」「祈禱」を并記しあり。太田全齋の編輯せし『契利斯督記』には萬治年中の舊記に錄せる「七所の願念」のことを記載したれど、實質に及ぶ所なければ參考に資する所なし。今寫眞に出せるは、第一節「願念の本」の首（百三丁オ）第七節「エサメの事」の首（百二十四丁オ）尾（百三十二丁ウ）第八節御札しの「願念」の首（同上）尾（百三十八丁ウ）にして、それらの部分及び之に連接せる前後の文章は活字に印行して示せり。第六節「アベ・マリヤの時の願念」は全文を印刷し、其の一頁を寫眞とせり。本章抄録中の洋語名彙は、第三章抄録中のものと共に末に附して參照に便にす。

この抄物の文體は、當代の吉利支丹文學の文體と同じく近古の俗文に根ざし、語氣に間々宗門の臭味あれども筆致雅馴なる趣なきにあらず。行文、中世の物語草紙などの慣用字句のおのづから取入れられたるあり、佛敎川語が多く、の拉丁葡萄牙語の間に伍して散見せるあり、固より文章として勝れたる所はなけれど、一種の異色を帶びて讀者の意を惹く所大なるべし。文字は行數大小一様ならず、前後精粗の差別あれども筆蹟巧にして、殊に初章彌撒の部の如きは頗るみごとなる出來なり。時に吉利支丹版の書物中に見ゆる字形を連想せしむる文字も見え、變體假名亦頗る多きも、この報告書中には、すべて通用の假名に書改めて印刷せり。耶蘇基利斯督また提字子などの拉丁名のモノグラム（合綴字）を用ゐしこと『きや・ど・ぺか・どうる』『破提字子』等の慶長元和年間の刊本に見ゆる所の如くなれど、字形に少異あり。文中、方言訛音も交り、清濁の

相違も認めらる。中には發音言語上の相違せるにあらで符號文字の書違へもあるなるべし。往々脱字あり文句の不通あり誤寫せる所多きは致し方なし。

從來吉利支丹側の文献に關しては、文書版本等の我國に發見せられしこと往々あり、又近年は古刊本の歐洲より再び本邦に回收せられ寫眞の我國の學府文庫等に將來せられしもの相踵ぐと雖も、抄物類の普く世に知られしものに至つては、東京帝室博物館所藏の『耶蘇敎寫經』と附名せる拉丁文聖歌（プロサムス）を平假名にて書きたる小本一冊あるに止まれり。この冊子は、天草亂後官沒せしものと傳へられ、片山直人献納とあり、内容は東本抄物と異なれども、大小の差こそあれ形式相似かよひたる趣ありとす。その他東京林若吉氏が『こんてんつすむんち』と共に先年越前より得られし吉利支丹曆書の如きものあり。長崎浦川和三郎氏が『公敎會の復活』の附録に刊行せられし浦上外海地方及び生月嶋に傳はりし祈禱文の類あり。その他幕末明初ベルナルド・ブチジャン師が編録印行せし『聖敎初學要理』と『聖敎日課』とあれど、これら西肥に發見せられし抄物の原本、今いづくに傳はれるやらん予輩未だ詳にせず。

新井白石の『西洋紀聞』及その以前については姑く説かず、紀聞以後、幕府晩季に方りて諸藩の學者が宗門に關する遺品抄物を編輯して一書を作り或は單に書留め又謄寫なごせしもの、福山藩の太田全齋の『契利斯督記』水戸藩の立原翠軒の『切支丹法器』仙臺藩の大槻磐水の『金城秘韞』あり。前二書は寛政年間、後の一書は文化九年の編なり。太田氏の書は、萬治頃の抄物を錄せしものにして、東本吉利支丹抄物に對校すべき資料あり。大槻氏の書は、支倉六右衛門南蠻將來の諸道具を書上げて考究せしもの、題して『歸朝常長道具考略』とあり。これに由るに、切支丹諸道具

入箱の中に書物大小十九冊ありき。こは六右衛門等の覺書や聞書にて日本紙の假名本なる由に見えたり。然るに、この書物文化年間には存在したりしに明治年間早く亡失して影を留めずなりしと、大槻文彦博士の同書補遺に見ゆ。惜むべきことなり。

立原甚五郎(翠軒)が寛政十二年庚申識せる『切支丹法器』⁽²⁾と題する書は予大正九年四月水戸彰考館に於て一見せし所なるが、その書上目録によると、服飾類、コンタス、メダル、繪畫銅像などの遺品の外、抄物類には、曆本の如きもの二枚、寫本の横帳三冊、折本一冊、綴本二冊、平假名本三冊など存したりと見ゆ。これらの寫本は辭書の類、祈禱文その他宗門の抄物なるが如く、外に蠻書と標するもの大小二冊あるが、こは洋字の印本なりとおぼし。これらの諸品は立原氏の識語によれば、元和寛永頃邪宗徒より沒收せしものに屬するが如く、本年東京に於て水戸家の秘庫より耶蘇敎遺物を發見せりといふは、これらの物と關せざるや否やを詳にせざれど、若し今日それらの物が發見せられたらんには、東本抄物にも有力なる光明を與ふるものと謂ふべし。サトウ氏が往年紹介せし同侯爵家所藏の慶長五年長崎耶蘇會學林刊行本『ドチリナ・キリシタン』⁽⁴⁾の如きが、類本と對校上裨益を與へしことは、此方面の研究家の均しく認むる所なり。

【註】(1) 原題に云はく、*Missale Romanum, ex Decreto Sacro*

sancti Concilii Tridentini Testitum. Paris, MDC

LVI 類本は種々あれど。今はたゞ本學所藏本のみを擧

げたり。

アンリ・コルデエーの書志によれば、利類思 *Luci Ding*

*lio*の譯書にて『彌撒經典』と題する西紀一六七〇(康熙九

年)北京刊行本ある由なり。

(2) 『切支丹法器』は、内題にては、「切支丹法器諸品物」とあ

り。この記録に名を掲ぐる所の抄物より摘錄せる文章あ

り。今左に抄して參考に資す。

きりしたんとは J X O (原本合字)の御おしへを心より

ひいですにうくるのみならず、ことば身もちを以てあ

らわす人なり。

きりしたんはきりしとよりかたとる名なり。X O (合

字)を申は、油をぬられ玉ふといふこゝろなり。むかしは、ていわり、させるどうて、ほろへいた、此の三さまの人導き油をぬられ玉ひしとなり。JXUは帝王上のていわり、させるどうての上のさせるどうて、ほろへいたの上のほろへいたにてましますによつて、くだんのとき油のかわりにすひりつさんとのがらさのみち、てもたせられたる故、XOと名付奉る也。

おらしよといふは、我念を天に通じ御主JH(合字)に申上るのぞみをかなへ玉ふ道はし也。

右の如き語釋の外「ソマナの内」、「アツベントの内」年中の祝」などと題して、宗門の名稱の解釋を掲ぐれど煩

を避けて今は省きぬ。

本書彰考館本には、寛文十二年庚申六月二十九日立原甚五郎識とあれども、寛文は寛政の誤寫なるべく、多分烈公の時、水藩にて邪宗門の攷究を盡し、安政六年豊田天功の「息距篇」二十冊編纂の舉もありし程なれば、それらの機に寫しゝものにはあらぬかと思はる。

(3) 近刊「圖書館雜誌」第五十二號(大正十二年三月)雜誌水戸家傳來の基督敎書類」等を見るべし。

(4) 「日本亞細亞協會雜誌」第二十七卷第二(一八九九年明治三十二年刊)サトウ氏の解説及びタイトルレイヂを附して全文を羅馬字の儘に掲載せり。

(一) 御みいさのおかみやう并ニ觀念ノ事

一 こんびさんのだん。あだんとかにおちられたることをこうくわひいたし、あやまりのおらしよを申上へし。

二 いんごふいどのだん。これはほろへたす、政御しゆつせのしさいを(?)かねてつけ申されたる(ことをくはん?)ねんいたすところなり。

三 きりゑいれいぞんのだん。此世界の善人りんぼの御人數ふかく御しゆつせをましかね申されたるところをくはん念いたすへし。

四 ぐろふりやいねきせりすのだん。是は御たんじやうの時あんし、ようたひ申されたることはなれば、御出世の御をんをくはん念いたすところなり。

五 しよばんのどうみぬんすおびすくんは三人のていわうに御身をあらわし玉ふ所なれば、
へりくたりて以テしんもつとなるさきりひいしよをさけ申どのたがひにすめあひ
奉る所也。

六 おらしよのだん十二の御とし天ほろにおゐてさんたまりやを見つけられ玉ふ所なれば
此あたるにおいておにまを以テみつけたてまつるのそむことはりをこひ奉るところな
り。

七 あびすらのだん是はさんじゆあん奴の御さきへまかりいでら(?)ればうちずもへにて
んしやのだうりををしへ玉ふ所なればこゝろをもよし心中をどゝのへかくこのだん
なり。

八 あれるうやのだん是はさんしゆあんの御てより奴のばうちずもをかゝり玉ふ時天ひら
けたる御よろこびの所なればいさみを以テでうすひいりよにてまします御子をしんじ
つにうやまいたてまつるへき所なり。

九 御きやうを左右になおし玉ふ事じゆてよの一もん御をしへをうつし玉ふ所なればかつ
うはおそれかつうは御おんの御れいを申あけ奉る也。

十 あわんせりよのだん是は奴ちきの御だんぎなれば此たつとき御おしへをたち奉るが
らさをこいたてまつるところなり。

十一 けれいどのだん是はもろくのあほうすを以テ御をしへをひろめ玉ふことはり
なればひいてすをつよくうけ奉りからさをねかひ申どころなり。

十二 二ばんのたうみぬすのだん。是せすきりしとかすくのきごくをあらはし玉ふを以て御身をし口人にしらせ玉ふ。いよくひいですを以て、政をしたひ奉りねかいをもよおす也。

十三 みつをかりすに玉ふとゝのへのだん。是はばすくわのせやをとゝのへたまひゑうかりすちやのさからめんとをさだめたまふだんなり。

十四 おへりどありやのだん。是はせやすきてちりのおこなひをさだめ、御をしへ御たいをさきりひいしよとしてさくけ奉るみちをさだめたまふころなり。

十五 てをあら玉ふだん。是は政しよひやうをなおしたまふ所なれば我等があにまのくらしいもいやしきよめ玉へと頼み奉るだん也。

十六 おらてふらてのたんじゆでよりせめられたまひて御身をつゝしみ玉ふ所なれば、せすゝの御しんろうをいたまかなしみたてまつるだん也。

十七 へればしよんのだん。是はせすゝせるざれんへいたり玉ふ時、萬人よろこびをもてむかへ奉る所なれば、たゝいまはあるたるへきたり玉ふべき所をくはんねんし奉り、あにまを以て御むかへにまかりいで、もろくのあんじよのたつとみ申さるゝさんどすくのことはを以て我もたつとみたてまつるどころ也。

○ めいんどのだん。是はあく人のてにかゝりからめどられ玉ふ御ばしよん所なれば、なみたを以て是をくはんし奉る。是御功力口たいせられわれ人をたすけまへと頼みたてまつり此さきりひいしよをうけとりたまへねんし奉るだん也。爰においてこゝろあてある人の

ため也。たいもくを申あくる所也。

十八 かりすのうへに兩のてをおい玉ふ事は石のはしらにからめつけ奉りちやうちやくい

たし奉る事をくはんねんいたすへし。

十九 あふすちやを、上玉ふだん。是はひらどす。政を萬人にみせ口ゑきせおふもと申たること

くかのぎよくたいをてうすはあてれへ御めにかけ此きずの御しんろうをさゝけ奉るさきりひいしよのたん也。

二十 かありすをあげ玉ふ時ひらどすの所にて御せんたいよりなかし玉ふ御ちを我等か科

かのたいもくとしてささけ奉る所なれば此さきりひいしよをたしかに請取にたまへどねんし奉るだん也。

廿一 あふすちやとかりすと一ツつゝあげ玉ふ事はくるすにかゝり玉ひて正はあてれへ御

みをさゝけ玉ふ所なればわかあにましきたいどもにさゝけさきりひいしよになしたてまつるだん也。

廿二 はあてゐるのふすてゐるのだん。是はくるすのうへにてあく人のために正はあてれをたの

みたみふ所なれば彼おらしよに我等一ちし奉りどもにとかの御ゆるしをはしめとして、あにましきたいのために無他いかほどの事をたのみたてまつるたん也。

廿三 はあせんのたん。是はくるすにおいて正も我等どのあひたに無事をさつけ玉ふだんな

れはこつかしよだいまやうの無事をねんし奉所なり。

廿四 あふすちやを三ツにわり玉ふだん。是は右のさきりひいしよこゝろさす所をあらはし

玉ふ儀也。一ツにははらいぞのへあどのぐらふりや、ノため一ツにはげんせのゑけれしや、くみの衆のからさ御はんしやうのため三ツにはふるかたうりよのあにまくつろきのため是也。又正の御體も御はしよんを以て三どころにわかり玉ふ儀をくはんし奉るへし。一ツには御しかい石くはんにおさまり玉ふ二ツは御あにまりんほへ下り玉ふ三ツには御ちくるすのもとになかしおき玉ふ也。

廿五

あにうすていのだん。是はむかしひつしをさゝけ申さるゝことくいま此さきりひいしよをさゝけ奉るどくはんねんし(たる)たんなれは。どかの御ゆるしを別てこい奉るへし。

廿六

だうみぬんすのだん。是はくるすよりおろし奉る御しかいをさんたまりやいたき玉ひ、おのく御せうたんなされたる所なれは我かどがによつてかゝり玉ふことくわがあにまにきたりたまふへき功力なき事をなけき奉るへきたん也。

廿七

こむによのだん。御しかい石くはんにおさめ申たる所なれは我等かあにまにやごし奉へき事をねんし申だん也。此ころにすこしよみ玉ふきやうもくはゝる也。

廿八

だうみぬんすおびすくんのだん。是はいきかへり玉ひて、あまたの御でしに御たいをあらはし玉ふどころ也。

廿九

おらしいよのだん。是は御上天なされ我等かためにたへず正はあてれへ御おらしいよし玉ふ所なれは、右條々の御おんの御れいを申上るたん也。

三十

のちのたうみぬんすのたんは、これはじゆいぞの時ふたゝびあまくたり玉ひ萬人に御みをあらはし玉ふだん也。

卅一 いてみさへすのだん。萬事御じやうじゆのしるしとして諸人に御いとまをつかはし玉ふだん也。

卅二 へんさんのだん。是はしいゆいぞの御けつぢやくとして善人あく人におほせわたさるゝ御ことはなれはなかにもせん人にくわほうをさつけ玉ふ事をくはんねんいたし奉るたん也。

卅三 すへのゑわんせりよにははらいぞのなかきみよをよろこび奉る所なれは、後くろふりや、にいたり奉る事をねかい奉るたんなり。

【註】 モノグラム 合綴字は原本にては本章の分と他章の分との間にその他處々

に少異あれど、印刷上の都合によりすべて一様に改めたり

「参照」洋語索引 (第一章)

あふすちや(一九)(二一)(二四)
あだん(一)
あにうすてい(二五)
あにま(六)(一五)(一七)(二一)(二二)(二四)(二六)(二七)
あばうすところ(一一)
あるたる(一七)あたる?(六)
あれるうや(八)
あんじよ(四)(一七)
いてみさへす(三一)

hostia(拉) 餅、菓子○阿斯底亞(日課)
Adam
Agnus Dei(拉) 天主の羔(日課)
anima(拉) 靈魂
apostolo 宗徒
altar (祭壇)
alleluia 阿列爾亞
anjo 天神、天人
Ite missa est (拉丁語祈禱文の句)「往け、ミイサ終る」

いんどろいと(一)

ゑうかりすちや(一三)

ゑきせ・おふも(一九)

ゑけれしや(二四)

ゑびすとと(七)

ゑわんぜりよ(一〇)(三三)

【あふすちや】

おへりとありや(一四)

おらしよ(一)(六)(二二)(二九)

おらてふらて(一六)

がらさ(一〇)(二四)

かりす(一四)(一八)(二一)かありす(二〇)

きりゑいれいぞん(三)

くるす(二二)(二三)(二四)(二六)

ぐとふりや(二四)(三三)

ぐろふりやゐねきせりす(四)

けれいど(一一)

こむによ(二七)

こんびさん(一)

さからめんと(一三)

introito (入祭禱)

eucharistia 聖體

Ece Homo(拉)「見よ、人」の義

ecclesia(拉) 會、教會

epistola(拉) (書翰)

evangelho (福音)

(前出)

offertoria(拉)

oratio(拉) 祈禱、經

orute fratres (拉丁語祈禱文の句)「祈れ、兄弟等よ」

graca 聖寵

Calis, caliz 嘉利斯(日課)

Kyrie eleison (次章を見よ)

cruz 十字架

gloria(拉) 榮福(日課)

gloria in excelsis (祈禱文の句、無上の榮福)

credo 信道

communio(拉) 通功

confissao 告解

sacramento 秘跡、聖事秘跡

さきりひいしよ(五)(一四)(一七附)(一九)(二〇)(二二)(二四)(二五)

さん・じゅあん(七)(八)

さんた・まりや(六)(二六)

さんとす(一七)

じゅいぞ(三〇)(三二)

じゅでよ(九)(一六)

ぜず(一六)(一七)

ぜず・きりしと(一二)

ざるざれん(一七)

だうみぬんす(一二)(二六)(三〇)

たうみぬんす・おびすくん(九)(二八)

てうす・はあてれ(一れ)

てうす・ひいりよ(八)

天ほろ(六)

はあせん(二三)ばーよん(一七附)はしよん(二四)

はあてる・のふすてる(二二)

はあてれ(二二)(二二)(二九)

【てうす・はあてれ】

ばうちすも(七)

ばすくわ(一二)

sacrificio (犠牲、御供)

San Joao

Santa Maria 聖瑪利亞

santos 諸聖

inizo 御紀明(神の審判)

Judeo (如達亞)

Jesus

Jesus Christo

Jerusalem

Dominus(拉) 御主

Dominus vobiscum(拉) (拉丁祈禱文の句、御主等主と共に在はせ)

Deus Padre 天主聖父(日課)

Deus Filho 天主聖子(日課)

templo (殿堂)

paixao 御苦難

Paternoster (祈禱文の名)

Padre 神父

(前出)

baptismo 洗滌、御水授り

pasqua 御巴斯卦

はらいぞ(二四)(三三)

ひいてす(一一)(一二)

【ひいりよ、てうす、ひいりよ】

ひらとす(一九)(二〇)

ふるかたちりよ(二四)

へあと(二四)

へにてんしや(七)

へればしよん(一七)

へんさん(三二)

ほろへたす(二)

みいさ(題名)

めんど(一七附)

りんぼ(三)(二四)

【註】

語彙中に(拉)と標したるは拉丁語形にして、その他特に標せざる最多数は葡萄牙語形なり。拉葡同形なるもの、又拉葡混同とも認めらるゝもの、拉語の儘諸國に通用せるもの、神人の名稱地名等煩を避けて一々註せず。譯語譯字振假名は司教ベルナルド・ブチジュアンが録して明治元年長崎に刊行の聖教初學要理によれり。文字は多く明末清初の天主教者の漢譯字を採りたるが如し。まゝ聖教日課中に見ゆる漢字をも註しおけり。この書も亦ベルナルド司教の出版に

Paraiso 天堂 はらいぞ

fiel(拉) 信德 ひいです

(前出)

Pilatos 比辣多(日課) びらつた

Purgatorio 煉獄 ぶりがどうりょ

beato 聖人 べあつた

penitencia (悔悛)

prefacio(?) (序誦)

benção (降福、祝禱)

prophetas (豫言者)

missa (拉) 御彌撒 ごみさ

memento (紀念)

limbo (陰府)

して、原本元と故本學教授上田敏君の愛藏書なりしを、歿後附屬圖書館の有に歸せるものにして、故人は生前大正元年八月その校註本を藝文に附載し、歿後遺族大正六年之を單行せり。

()中の譯字はラゲー師の「佛和大辭典」等に據り現行の定譯を宛てたるものにして、必しも公教會の所用を採りしにあらず。又用語の解釋は煩はしければ故らに註記せず、且つ宗儀の故實を究めたる上ならでは詳にし難き所多し。

(11) 聖なる sacramentum
Santissimo Sacramento

のらたごや
Ladainhas

きりあれいそん きりしてれいそん
Kyrie eleison Christe eleison
きりあれいそん きりしてれいそん
Kyrie eleison Christe eleison
きりしてあうてなふす きりしてあさうてなふす
Christe audi nos Christe exaudi nos
はあてん じやり だ
Pater de coelis Deus
みせれい なうひす
Miserere nobis
ひり、れてんとる むんぢ だ
Fili redemptor mundi Deus
みせれい なうひす
Miserere nobis
すひりつ さんて だ 同
Spiritu Sancte Deus
さんた ちりにたす うぬす だ 同
Sancta Trinitas Unus Deus.

【註】 右本文は拉丁語の平假名書きなるが、題名のみは葡萄牙語

を邦語の格にてあらはせり。葡語サンチイシモ・サカラメン

攝津高槻在東氏所藏の吉利支丹遺物

聖瑪利亞頌徳の禱文 (聖教日課)

あんあらじわれあらわれたま
御主我等を 憐み給へ
きりしごわれ あはれたま
基利斯督我らを 憐み給へ
同 同
同 同
きりしごわれわれ きたま
基利斯督俯て我らに 聴き給へ
きりしごわれ きたま
基利斯督我らを 聴き届け給へ
てんましや であうおんをや
天に 在す天主御父
われ あはれたま
我らを 憐み給へ
せかい あがな
世界を 購ひ給ふ天主御子
同
であうすびりごさんご
天主斯彼利多三多
同
みつるべらうなごいつたいでうす
三位御一體の天主
同

トは直譯して「至極の尊き秘跡」の義ラタニヤスは葡語のラ
ダイニア又リタニアの複數形に當る。英佛にてリタニー獨

にてリタナイと音じ、邦譯して連禱といふ。初二行の原文がもと希臘語に出でしことは言を俟たず。全文横字を並記し、下段にその雅馴なる舊譯文を對照せしめたるは編者のわざなり。こは西肥の信徒間に傳誦せられし文句を錄して明治七年ベルナルド・ブチジャンの印行したる「聖教日課」中に存せるに據りたるなり。

抄物原本には、以下別の連禱文三十餘行を同く拉丁語のまま錄したれど今之を省畧せり。

「公教會の復活」附錄、生月鳴傳來の祈禱文にも、ダ、イヤス（ラターヤスの九州訛り）とて左の文句を掲ぐ。

キリエ	レンゾ	キリスト	レンゾ
キリスト	アウデノビス	キリスト	ジャウデノビス
マイテル	デジラシ	デウス	ミジリ、ノビス
ヒゲラ	レントロンデ	デウス	同
スピリト	サンチ	デウス	同
サンタ	チリノト	ナナサ	デウス
			同

（前後の文句略す）

傳誦の間音韻の訛りしこと、殊に九州の土音のまゝに訛りし點、興味甚深し。

（三） 一七日にわくる最初のめぢ（た）さんの七ヶ條

○第一、せ、くん、だ、へり、あ、

まづしよ日には我か身のぼんくわを思ひ出す事。しんしやうを見しる理をくふうすべき事也。ぢうくわをおもひ出すを以テ正御一體ヨリほかによき事もち玉はさるごうりをかんばんすべし。それすなはち、しよせんのかもごかうしたるへりくだりなり。せんじをもとめたるくわん念也。（下略）

○て、る、い、や、へり、あ、

（上畧）
第四、なからゆる内にもひつぢやうたる事まれに萬事へんゑきする事をくわんせよ。一ツみにとりては物ごとにつろひ安くしてへんする事風にしたかうなみのごとく也。昨日まで思ひ

し人を今日はいくみあしたに定めし事をいまたはかる事のみなれば、何を頼何をかたのしまぬ。めいよたから知ぎやう等も皆かれに同じ。昨日ばんせうのきみとあをかれし貴人も、今日ほるらうして人の下人と成事もあり。ゑひぐわゑひようなりしも、こつしきに及事もあり。命のうつり替る事かんべんするに、一時の命も存命をうるにはあらずしてくち行もの也。たとへば、ともし火のかゝやくほど耗り行か如也。眞にあしたに開ヶ晝にはしほみ、暮にはちりみたるゝ花のごとし。如此かわり行處をさしていざいやすの語に、こつにくは山野の草なれば、其たのしみは花のごとし。是に付てさんせらうにも、の語に、人間のあたなる事を見るに、せつなもさかゑ行か、をそろへ行かを二ツをはなれてたゝゑて有事なし。かんやうの事を云内にわれ今は次第におどり行也。眞に此内は山野の千草の如ク、たのしみは花なりと云へル事れきせんふんみやう也。今まてちぶさきくわへし子は、見る間にたちて行き、今日あよみはじむると思へばはや年さかりになり、若年と見へしは老人と成り、せい人しけるよと思わんさきにはやらうじんとなる事をおどろくもの也。きせん萬人ヨリしたわれしゆうがんびれひなる女もひたいにしわをたゝみこひしのびし人までもかへてみぐるしく思ひすさむもの也。(下略)

○せすたへりあ

五日にはいんへるのゝくるしみをくわんすべし。此めちたさんにはてうすの御おそれと科をにくむ心をいよくめたに思ひすへべき爲也。さんべるなるどのいわく、いんへるのゝくるしみに、^みたちはおしへ玉ふ如ク、しきさう有すかたたとへのおもかけを以てくわんすへき者也と云り。(下略)

○さばど

六日にははいそいそべなへんつらんさのぐらうりやをくわんすべし。是いよ／＼世をいとひかのたのしみを頼奉る心をおこすへき爲也。此くわん念のもとつきの爲□□多き中に五ツの儀をとりわきくわん念すべし。一ツには所がらのすぐれたる事二ツには□ないの人のいさましき事三ツにはてうすをおかみ奉る事四ツには色身のぐらうりやの事五ツにはあらゆる吉事をきわむへき事は也(申略)

○どみんご

どみんこには正の御恩のくわん念し奉るべし。其御禮を申上べき爲又は其御大切にへたち奉るへきため也。さる程にてうすの御恩と申奉る事かきりなしと云共いかにも大き成をあらひ五ヶでうにつもつて是をたい(切に?)しあんすへき也。一には御作の御恩二には納め玉ふ事三にはたすけ玉ふ事四には蒙る御恩五には一人ツ、にとりわけてかうむる御おん中にもかくれて人しらずの御恩是也(下略)

其上此くわん(念?)を以てわきまふへきは此等の御恩にヨリテいか斗の御かんちやうを請おい奉り、我方ヨリはうじ奉る事の分りやうヨリも、請おひ奉る方は尙多キ事をわきまへべし。其せうごにはほうじ奉ル事は云に及す、わきまふる事にさへ及び奉らされは也。

○右のめぢたさん并其德儀事

右條々の儀皆取入りの時くわんすべし。是によつて七ヶ條にわけて七くわん念と名付ル也。しかりといふとも是ヨリほかなる理りをくわん念致すましきにあらず。其故はさいしよに云へ

る如我等か心中のおそれと大切ををこし御さづけのまだめんをたもたするすゝめとし
て理りはみなめぢたさんの理りと心得べし。(下略)

(四)

願念の本

きりいたんのくわん念といふは御影の前にさしむかひこいたすをつまぐりておらしいを申
事にてはなし。たゝくわん念すべき題目をとりて願念には此事をくわんすべし定めて其題目
にさまゝの儀りを付て一この間我身におこなふべきでうゝの安心をきわめ又は御おん
のふかき事をわきまへ御禮を申上又はてうすヨリわれ等に與へくださるる御しひをみしり
御大切にもへたちりんじうのみきり此しゆぎやうを身になすへしどのさとりをひらくため
のくわん念也。(下略)

くわんねんの條々

てうも人を作り玉ふ事は御作者御主を 大切に存知奉り御奉公仕るを以テ其身のこしやう
のたすかりをもとめさせたまわんため也。それによて正を見しりたてまつり御奉公致すきり
いたんは人間の中のうちとんげくわはうたる者也。

てうすはなつらの徳に對し奉りてもつかへ奉らん事かんようなるのみならず我等に與へ玉
ふでうゝかく別の御おんに對したてまつりて御大切に存知たてまつらすしてかなわん儀
也。此御恩の中に我等を作り玉ふ事尤第一の御恩也。(下略)

こゝろきよ

いかに天地の御あるし我等か御作なされてへ申上奉る。御身はせかど命ノみなかみにてまします。よて有ほと命は御身より出し玉ひあるほどのもの御身ヨリつくられ奉る也。御身まします。すんは我命も此身も有へからす。今こゝろくわん念ヨリまこと(?)のひかりをうけ奉り、御身とわれをはしり奉るか故に、我かひかり御身を貴ミ奉る。こひねかはくは、此ひかりをえするさわまで御身を貴みとゝけ、今世ヨリこしやうに至るまで、御身を貴みとゝけ奉るやうにはからい玉へ。しんしつに頼奉る。

同さんたまりやへ

いかにひるせんさんたまりや、つゝしみうやまつて申上奉る。われひほのたいないよりいどけなきほどは、いは木に同ク春秋をおくり年たけ世あひさかななれば、すてにいもせの津を渡り、世のうきよしに心をくたきうき事きかぬよるべ何國そとたつねれば、てんの御國より外になしと露斗なるよすかをもとめて、つひにはかりなき御ひかりをかうふりしするかけの國よりひかりのみちにいてなから、さいしやうのうみなをふかく、えやうしの山ますくたかうして、御大切のさわりとなりてしつむ我等をたすけたまへと、爰にてきりへあへまりや、三くわん申てくわん念をいたす也。

えするくわん念

しするありさまを目の前にくわんをへし。しからはさいこの時みたるゝ事あるへからす。此くわん念をする人は、世のうきしつみ、さかへおどろへ、いつれもゆめのたはふれそとわきまふる

か故に、よしあしに心をどゝめず、此ひとへにてんのすみかにのみ心をよするもの也。御あるし
せすきりしどの御ことは、いかに人せかひをこそくもうくるといふども、あにまゝいた
みを請るにおひては、何のゑきそぞ、又のたまはく、いかにぐにん、今や口海ヨリあにまをうはう
べし。しからはなんぢか調たらん事々、たか物と成へきそ、まことなるかな此事、四かひを一人の
たなこゝろににきり、百のたからをわれひとりしてもちあまるといふ共、かはねの上に露ほど
も用なき事、人事に目の前に見すや。これを心のそこよりさとりたるにおいては、口にこそ御は
いよん、おつとめにはおよひたまへ、これほどの大事にあらずんば、てうす此おつとめをしたま
わんや。これによてきりしたんは、夜事にせんあくをたゞしきわめて、科あればなみたをなかし
おゆるしをこひ奉り、御奉公をつとめたらは、其御禮を申上すこしのせんこんも御身の御血の
おくりきにあわせ玉ひて、我等が大切のしるしども御らんせば、何の悦ひか是にすぐへきど、く
わひかうほつくわんいたすへし。爰にてころきよを申上、今夜此ふしどをさらまして、あにまめ
し上らるゝにおひては、いまの身の科をおゆるしなされ、からさのみちをはつれ奉らんやうに
と、ふかく御しひをこひ奉り、あすを期むかる事なかれ。

あへまりやの時の願念、貴きさんたまりやの御上をくわんする也。

天地はしまりてより、此たつときひるせん、まりやの御時まで、せかいにすひりつのみちは、やみ
となりてにぎりきわまりたる中に、此きみたゝひとりむかしも、いまたためしなきひるせんの
御くわんを、おこし玉ふ事、ていの中のはちすのことしひるせん、女人にてまします也。もとより
てうすも、其御ためにゑらひ出玉へは、此きみ二八の春のするゑ三月二十五日のたそかれ時に、さ

んがびりゑるあんしよをさんた(まりや?)のしんこう(?)てんの御使としてさし下し玉ふもの也しかれはさんがびりゑるくわうみやうかゝやきいきやうくんするありさまにて此きみの御前にかしこまりいかに貴きまりやへ申上奉る一切の人間の御たすけては御身の御たい内にやどり玉ふへしどつけ申されたり御返事に見玉ふことくわれはつたなきてうすの御下女なれば仰をそむくにあたわすどの玉ふと共にかの御體內に御あるしせずきりしどの御むまにたてやどり玉ふと云ふ事を目の前にくわんすへし爰にてあへまりや返申てくわん念致すへし。

ゑさめの事

第一へるしんぬをとなへ其時の御おんの中にも其日蒙りたる御おんの御禮を申上る事

第二我か身のあやまりを見わけしるからさを與へ玉へと頼奉り申へき事

第三心ことは身もちを以て其日おちたる科をしあんし思ひ出すへし

第四こしかたをかう□とし今□さんあくすちによの□き御はしよんのみすてりよに對し奉りて自作のおらしよの事(中略)

さんたまりやを頼たてまつりころきよを申へしころきよとは我か心のうちにある事をことはにつゝりて申上る事也

御たゝしのくわん念

我か身の上を糺明して其日とかをおかさんにおひては御れいを申上も又惡事あつこん惡念あると思はゝ大きにくだかなしみ二たひ此事おもわしいはせしと思ひ定めて御ゆるしをこ

ひ奉るべし科をもちなからあらためずして年月をおくる人は、とりけた物にもおどりと
 おもへ。それをいかにといふにてうるいちくるいむしけらのたくひは、現世一たん命斗をもち
 てしすると共になくなれば善惡しやうしの御定めにもあつかからず。しかるに、人はあにまずひ
 りつあるの一命也。ふたゝひの命をもつによて、けん世にて思ひとおもひし念々、いひといひし
 事は、しとせししわざのせんあくを御きうめい有て、せん人にははらいそのたのしみ、あく人に
 はいんへるのゝくるしみを興へ玉ふ事、てんの如地のことし。もし此しやうはつあるま敷とお
 もはゞ、てんにも地にも四季萬物にも定め玉ふ主あるへからず。(中略)ある人、一期のあひたはこ
 しやうとて何國をさしてあるへきそとておもひのまゝにくらせしか、りんしうのきわとなり
 て、あるものをくありけるものをあるものをと、いひてなくくしくたる也。此一大事をてうす
 御しひの上よりのかしたまわん。(以下紙葉闕)

〔参照〕洋語索引 (第三章及第四章の抄録中所出に限る)

あにま・すびりつある	anima spiritual
あへ・まりや	Ave Maria
いさいやす	Isaias
いんへるの	inferno (地獄)
ゑさめ	exame (糺明)
こんたす	contas 珠數(訛コンタツ)
ころきよ	colloquio (對談會、話所願)

さばと

さん・あぐすちによ

さん・がびりゑる

さん・せらうにも

さん・べるなると

すひりつ

せくんだ・へりや

せすた・へりあ

てるしや・へりあ

どみんど

なつら

ひるせん

べなへんつらんさ

へるしんぬ

まだめんと

みすてりよ

めちたさん

Sabado (土曜) 七日メ

San Agostinho

San Gabriel

San Jeronymo

San Bernardo

esprito (神靈)

Secunda feria(拉) (月曜) 二日メ

Sexta feria(拉) (金曜) 六日メ

Tertia feria(拉) (火曜) 三日メ

Domingo 主日(日曜) 初日

Natura (造化、天然)

virgem 童身(童貞)

benaventurança (福樂)

indamento (誠)

mysterio (玄義)

meditação 觀念(默想)

【註】

第一章中の洋語索引に出でたるものはこゝに省けり。洋名の多くは葡萄牙なり。されど拉丁語と同形のものも交れり。

譯語は古き典據あるものをも取りたれど、新舊兩譯の未詳なる場合あれば、こゝには大概の該當を期したるのみ。